
とある猫の一日

秋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある猫の一日

【著者名】

N2810S

【作者名】
秋月

【あらすじ】

どこのでもいる猫の話を、ほのぼのと書いてみました。
初めての投稿です。

(前書き)

創作初心者の作品ですので、『容赦ください』。

私の名前はマダラだ。黒ぶちのオス猫で、大学の学生寮に飼われている。

寮母さんという人が1年前に野良猫だつた私を拾ってくれたのだ。
純和風の造りの学生寮の縁側に置いてある座布団が、私の特等席だ。

「あら、マダラちゃん。ひなたぼっこ~」

寮母さんが私に一言声を掛けて、また仕事に戻つていく。

それに私は「いやあ」と一言鳴いて返す。

寮母さんはいつも優しく笑つてるので、私は寮母さんが大好きだ。

そしてこの寮も穏やかな空気が流れているので、なかなかに気に入っている。

この寮に住む学生たちも、面白い奴が多く、いつも私によくしてくれるので、結構好きだ。

「いやん」、またひなたぼっこしてんのか

「いいなあ、猫は気楽で。俺も猫になりてえ

「俺もー」

西側の男子寮から、清志と修司というオスの人間が降りてきた。

「いづらは人間の間では美形で通っているらしいが、私には人間の美意識は分からぬ。」

私がからしてみれば、二人ともただのキャララキャラしたガキだ。

猫は気楽なんかじやないと言つてやりたかったが、残念ながらにやあとしか言えないので、ありつたけの嫌味を込めて

「いやあ

と囁ひてやつた。

「「めん、「めん。 そう怒るなつて

清志が私の頭を撫でた。

オスの手はメスの手よりも堅くて好かなかつたが、優しく撫でてくれたので許すとしよう。

「清志、修司。 授業に遅れるよ

今度は東側の女子寮から、友美という人間のメスが降りてきた。

友美はあまり私に話しかけないが、嫌われている感じはしない。

忙しいメスなのだ。

「今行く」

「じゃあな、にゃん！」

「にゃあ」

清志は私の頭から手を離し、友美の方へ行ってしまった。

修司もあとを追おうとしたが、足を止めて引き返してきた。

戻ってきて、修司は突然私の目をまっすぐ見つめた。

「なあ、猫。友美って清志のこと好きかな？」

そんなことは知らん。私に訊くな。

「清志はあーみんが好きみたいだからさ、一人が付き合つたりやうとか、そういう心配はないんだけど…」

あーみん…ああ、亜美とかいうメスか。

あのメスは私によくしてくれるし、なによりミルクちゃんの飼い主で、私の名付け親である。

なんだ、お前は友美が好きなのか、と思つたけれど、言葉が話せない私はただ「にゃあ」というしかなかつた。

「そつか…。やつぱ当たつて砕けりだよな」

修司は何を勘違いしたのか、一人で勝手に納得して清志たちの方へ駆けつけてしまった。

それから、寮からわらわらと学生共が出て行った。

今日授業がなくてまだ中でいる者もいたが、それでも寮はすっかり静かになつた。

日もかなり高く昇つてきている。

よし、そろそろ散歩にでも行くか。

「この辺りは、野良猫が多い。」

私もつい一年前まではその中の一匹であった。

「よお、マダラ。お前暇か

野良猫時代からの友達である黒猫が、散歩中に声を掛けてきた。

「の野良猫は名前無い。」

よつて呟く、仮に「クロ」と呼んでいる。

「暇といえば暇だな。何か用か」

もちろん、2匹とも言葉は話せない。「やあにゃあ鳴いて、意思の疎通をしているのだ。

「久々に蛙狩りでもしないか」

「そんな野蛮なことは、もうしないよ」

「野蛮って……ちょっと前まではお前もやつてただろう」

私は今から、ある猫に会いに行く予定だった。蛙狩りなどして、毛並みが乱れたら困る。

なにより、いまから会いに行くあの子には、蛙狩りなど似合わない。

「とにかく、蛙狩りはまた今度な」

「ちえ。ノリが悪いな」

クロはしつぽをだらつとわざと、去つて行つた。

私はクロが歩いて行つた方向とは逆に、再び歩き出した。

私が向かつたのは、大学の近くにある小さな白い一軒家だ。

そこには家と同じく小さくて白いメス猫が飼われている。

ミルクちゃんだ。

私はミルクちゃんを探して家の庭をうろついた。

「あ、マダラちゃん。いつのミルクに会いに来たの？」

ミルクちゃんより先に、飼い主の亜美に見つかった。

亜美はミルクちゃんを連れて、よく私の住む寮にやつてくれる。

亜美も人間の間では美形で通っているらしい。

まあミルクちゃんの飼い主なのだから、当然だ。

「マダラはミルクが好きなのねー」

「いや、いや、そういう訳では…」

「いや、いや、あ

「おひおひ、図星かい？ 可愛い奴め」

「いやあ」

亜美は私の頭を撫でた。

柔らかな手だったが、清志よりも幾分乱暴だった。性格が表れている。

「あたしも、修司君に会いに行く口実をせんもうつてるからねえ。どんどん仲良くなつておくれよ」

亜美の眼差しが優しくなった。

…もうこいつとなのかな…。

随分ややこしく絡まつてゐるようだ。

「ミルクー、マダラが来ててくれたよー。」

亜美の声をきこて、ミルクちゃんが玄関がら飛び出してきた。

いつも通りの白くて綺麗な毛並みが輝いていて、私はどきどきした。

「じゃあ、あたしは学校行くからね」

そう言い残し、亜美は去つて行つた。

躊躇いながらミルクちゃんの顔をみやると、彼女も私の方を見ていた。

「マダラさん、また遊びに来てくれたのね」

「あ…。ああ。…えっと」

「またお話を聞かせてくれる?」

「ああ!分かった」

ミルクちゃんは目を輝かせて言った。

私は今朝の清志たちの話や、途中であつたクロの話をした。

他の学生や、寮母さんの話もした。

ミルクちゃんは楽しそうに私の話を聞いていたが、なんだか今日は上の空だった。

それでも私はミルクちゃんに喜んでもらおうと、必死に話した。
…いつもなら、夢中になってくれるのだが。もしかしたら、体調
が悪いのかもしれない。

「…ミルクちゃん、私はそろそろ帰るよ」

「え、もう…じゃあ、また明日」

いつもは一刻ほど話し込んでしまうのだが、今日はまだ半刻も話
していない。

しかし、ミルクちゃんの体調を想いつて長話はできなかつた。

「また明日」

私はくるりと踵を返し、門を抜けた。

行きに振り回していたしつぽを、だらりと力なく垂らして。

時間が余つたので、寮の学生たちが通つている大学へ寄つてみる

「」とした。

学内をふらふらしていると、清志と修司と友美が三人で仲良く歩いていたのを見つけた。

しばらく遠くから観察していると、亜美がやってきて、清志を連れていった。

修司と友美だけが残されると、修司が明らかにそわそわし始めた。

…話すきっかけにでも、なってやるか。

「こやあ

私は、ここで歩いて修司の足もとにすり寄つた。

「あれ？お前、うちの猫じゃないか。なんでこんなところ…」

「あ、マダラちゃんじゃん！ ついてきかけたのかな

友美が私を抱き上げた。思っていたよりも慣れた手つきで、少々驚いた。

「清志になついてたからな。清志は今、亜美が連れてつちやつたよ
ー」

猫なで声で、友美は私に話しかけた。

修司も「そうだな」と、微妙に噛み合つてこまい相槌を打つた。

…」いつ、まさかヘタレか。

哀れだったので、私は修司に飛びついてやった。

「つかつ。なんだよ、危ないな」

「あははー。修司も好きなんだよって言いたかったのかな」

友美が笑つたのを見て、修司は腹を決めたようだ。

「友美、ちょっと話があるんだけど」

修司はゆっくりと私を地面に下ろした。

私は振り返らずに、その場を離れた。

今までは清志の方が優しくて好きだったが、修司とも仲良くなれそうな気がした。

がんばれよ、修司。

少し早いが、寮に戻らうと思つた。

そして、帰っこまたクロに会つたら、今度は蛙狩りでも鼠狩りでも付き合つてやつ。

私はいい気分で、ミルクちゃんの家の前を通つた。

ミルクちゃんは今、何をしているだろ?と思いつつ、チラシと庭を覗くと

クロと楽しげに話すミルクちゃんがいた。

彼女は私と話していた時は打って変わって、幸せそうにうつりと
りとクロの話に聞き入っていた。

自転車にしつぽを轢かれたような衝撃が、全身を駆け廻った。

人間なら、いつこう時はビックリするのだらうか。

言葉を話せない猫は、涙を流せない猫は、

一体どうしたらいいのだろうか。

「いつそのこと嫌われてでも、彼らの間に割つて入るうかと思つた
が、ヘタレの私にはできなかつた。」

ミルクちゃんはあいづワイルドなのが好きだったのだ。

それなら、蛙狩りでも鼠狩りでも付き合つておけばよかつた。

私は門の前でしばらく立ち尽くしていたが、諦めて一人でじょと
ぼ歩きだした。

ふと、修司のことを思い出した。

あいつは上手くやれただろうか。

私は、もう終わってしまったよ。

私が帰宅して、いつも縁側の座布団でしゃんぼりしていると、清志が帰ってきた。

清志は私を見つけると、いつものよつこ寄りで私の頭を優しく撫でた。

「…、なんかお前も元気ないな」

清志は、少し寂しそうだった。

私はなにかあったのか、といつ意味を込めて「いやあ」と鳴いた。

「なんかさ、今日修司も元気なくて。
…何も教えてくれないし」

清志は溜息を吐いた。

友達の力になりたかったのだろう。

おやうぐ、原因が自分にあるとも知らず。

…修司も、駄目だったのか。

自分のことではないのに、やるせない気持ちになった。

これで私が人間だつたなら、修司と酒を酌み交わしていくことだらう。

しかし私は猫でしかないの、とりあえず

「こやあ」

とだけ言つておいた。

夜も更けて、寮の外も中も静かになり始めた。

私の座布団のある縁側から、いつも月が綺麗に見える。

今日は満月だった。

マタタビにでも酔つ払いしたい気分ではあつたが、あいにく寮にはそんなものはおいていない。

のんびり月を見上げていると、男子寮からだれかが降りてくる足音がきこえた。

修司だ。

「まひ、お前にやるよ」

修司は私も座布団におつまみ用の味のついた小魚をざまあまいと置いていた。

前にも、清志と修司が呑んだくれていたときにも、もろいと食べたいことがあつたが、私には辛くて好きにはなれなかつた。

修司が、不意に口を開いた。

「人生、ままならねーなー」

たかだが二十歳かそこらの若造が何を、とも思つたが、確かにそうだな、とも思つた。

「…友美に振られちゃつてさあ。今、あーみんとか紗英とかと呑んでんの。あーみんつたらさあ、『何しょぼくれてんの! 修司だつたら、もつといい女がホイホイついてくるつて』

とか、言つて。はは」

…何なんだ、それは。

自分はモテるといつて腹巻がしたいのか?

というよりも、お前は振られたばかりなのに、他のメスと呑んでいるのか。

ちやつかりしてゐなあ、といつ意味で「…」やあ」と鳴いた。

「でも俺さ、友美が好きだつたんだよなあ。特別美人でも、可愛くもないんだけどさ」

修司はとつとつと語りはじめた。

私は黙つて聞いてやつた。

「でも友美には、他に好きな奴がいるんだとさ。…せつてえ清志だよなあ…。

…ホントにままならねえよ」

「…」やあ

ままならない、といつのは同感だつた。

修司は私の隣に腰掛け、ぼんやりと月を見上げた。

私も再び、月へ視線を戻した。

「あーー。」

突然、修司が叫んで立ち上がつた。

一体どうした。振られたショックで、おかしくなつたか。

「決めたよ、猫。俺、友美よりもずつといい女見つけて、幸せになる！ そんでもつて、いつか友美に『あの時修司と付き合つておけばよかった』って言わせてやるんだ！」

いきなり大声で宣言したので、驚いてひっくり返りそうになつた。

…「えりちゃん、かなり酔つていのらじー。」

修司は再び屈みこんで、私の頭をポンッと叩いた。

悪い氣はしなかつた。

「お前も、早く嫁さん見つけろよ」

「「」やあー。」

そんなこと、お前に言われるまでもない。

私もとつと立ち直つて、新しいメス猫を探そう。そして、いつかミルクちゃんに『あの時クロに乗り換えなければよかつた』と言わせてやるのさ。

お互い頑張り、ところの意味を込めて私はもう一度力強く、

「「」やあー。」

と鳴いた。

それから修司は部屋に戻つた。

耳を立てると、かすかに彼らの笑い声が聞こえてきた。

猫は笑うことができないけれど、代わりに大きくしっぽを振った。

今日は色々なことがあったが、月がきれいだったので、多分明日はいいことがあるだろ？

じつして私は今日も、眠りにつく。

了

(後書き)

製作時間は、プロットから改稿まで一日です。

超お手軽。しかも改稿一回しかしてません。

もともと動物がわいわいやる話が書きたかったのですが、結局こんな感じになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810s/>

とある猫の一日

2011年10月8日00時15分発行